

一編集者が見た小西友七先生

中嶋孝雄（もと三省堂）

（2）

小西友七編『ニューセンチュリー和英辞典』（1991） （今は『グランドセンチュリー和英辞典』と改称）

「いい和英ない？」とよく問われる。その問いはむづかしい。英語を読むほうは何とかできるけれども、書くほうはねえ、という不安いっぱいの方が多い。最近では World English(es) が話題となる機会もふえ、英語に“幅”を持たせてもよいと言われ始めているようである。そうは言っても英語は日本語とはまったく異種の言語であり、日本語に四六時中浸っている日本人にとっては、その習得が容易でないことは自明のことであろう。

三省堂が昭和 49 年（1974 年）の倒産後、一から作る学習辞典に着手したのは、1977 年（昭和 52 年）だったと思うが、校正が進み、書名の検討に入れる段階まで着たとき、対の和英がほしいという声が上がってきた。資金的にも少しゆとりが出てきた証拠であった。山田和男『新クラウン和英辞典』は第 5 版が出ていたけれども、「うちの生徒の学力では使えない」と言う高校側の声は日に日に大きくなっていった。「山田先生に易しい和英をお願いしてもむりでしょうな」と言う声も同時に入ってきた。重い病気から奇跡的に回復された先生は、しばしば三省堂にもお見えになり、和英辞典の内容について、熱っぽく抱負を語っていかれるのであった。しかし、会社側から見れば問題があった。先生は英語の達人であったが、人を使う達人ではなかった。人に仕事をまかせられないのである。第 5 版は助手の先生が初めてつかれたが、山田先生はその方の原稿を採用されることはあまりなかった。自分流の英語がありそれからそれることは許せなかったのである。異能が障害となったのである。

そこで会社は別の編者を捜すよりなかった。いろいろな意見があった。私も以前『最新コンサイス和英辞典 第 8 版』（1967）を担当したので、和英に興味があった。比較的短時間に作り上げるには、大勢の人の協力を得られる編者が何よりも求められる。私は当時知っていた先生方の顔を並べてみたが、小西先生を超える人は思い浮かべられなかった。ある同僚の推した先生は実力は申し分ないと思えたが、その著書から山田流のにおいが強く嗅ぎ取れた。私は反対した。もう一点、小西先生に有利な点は、QB の担当者で、そのことで人気も抜群であったことである。

部長は私の意見を入れ、小西先生にお願いしてみることを決心した。そのころ私は毎春英語や国語の辞典の内容説明に広島方面に出張していた。その帰りに小西先生をお訪ねした。「先生、一つ革命的な和英を作っていただけないでしょうか」私は単刀直入に切り出した。私は英作文で苦勞した話、当時も今もそうした苦勞を解決してくれる辞書がないこと、

模試では百人中 5 人ぐらいしか、まともな解答がないこと、エトセトラ、一気にしゃべりまくった。私がしゃべり終わると、それを待ちかねたかのように、「和英は一度もやったことがない」と先生は言われる。断られるのかと一瞬思う。「だけれども、おもしろそうですね。やりますか」私、ほっとする。「革命的というのではないけれども革新的なものをね。今の和英の内容が悪いんじゃないと思いますよ。今ある内容を活性化することでしょうな」私は、「やりますか」以下は上の空で聞いていた。打診のつもりが本決まりになった。そこで小西先生おもむろに口を開いて、「中嶋さん、やりますけどね。途中で止めるのは困る」。

“幻の大英和”のことがフラッシュバックする。「今度は絶対そんなことはありません」そう言う以外ないではないか。しかし“中止”から 14 年、その間に会社は倒産し、まだ管財人の厄介になっている、そんな会社の社員の言うこと、よく受け止めてくださいましたね。

社に帰って報告し、役員会の決済を経て企画にゴーサインが出た。この情報は時を経ずして山田先生の耳に入った。「小西君に和英をやらせるそうだな」と気色ばんでおられたそう。お許しを乞いたい。

小西先生はそのころ本務校で様々な役職につかれていて、お忙しかった。ジーニアス英和のこともあったと思う。特に、大学の移転委員の仕事はご健康に響いたのかもしれない。数か月ナシのつぶてであったので、電話するととにかく忙しい、もうしばらく待ってくれとのことであった。その日、先生はメニエル病に倒れられ、その年は休職されることになった。かなりのブランクの後お見舞いかたがた電話を差し上げたら、休職中の身で何もできないが、と前置きがあって、

(1) 見出しを 1 万 3 千語ほど選定しておくこと

(2) 中嶋の考える和英の見本原稿を作ってみては？ 編集部の希望が具体的に分かるから、それをたたき台にしていろいろ考えよう。

と言われた。(1) は東京のベテランの高校の先生に選定を依頼した。(2) の見本組は、a) 意味と文型の関係を明示する。b) 日本語の類語・類縁語を基本語の下に集めそこで記述する。c) 訳語として与えた英語の意味が明解であるように記述する。d) 英語の UC を記述する。以上の 4 点を考えながら、書いてみると、スペースばかり食ってなかなか上手に書けない。ほぼお手上げ状態となった。

見出し語の選定が終わったころ、次のメモのご指示が届いた。(1) 基本語に手厚いスペースを与える。(2) 類語・類縁語をグループ分けする。

上の準備を三省堂がすることになった。先の見出し語数は納得しがたかったが、見出し語の追加はいつでも出来ると考え、まず選定された 1 万 3 千語を表にし、3 点の類書の行数を調べ、基本 3 千 5 百語については類書平均の 2 倍のスペースを与えるようにした。類語・類縁語のグループ作りは。国語研究所の『分類語彙表』を大いに参考にした。上の仕事は大仕事で、原稿執筆が始まった後もずっと続いた。同僚の井内長俊さんがいなかったら出来なかっただろう。非常に忍耐強い人である。

社で、先生が療養中に用例カードを作ろうと思った。10 年ほど前から、英米の辞書の真似事でない自前の用例を使った辞書を作ろうとアメリカ人（日本でいえば、国文科修士卒

ぐらいの人)に頼んで、コンサイス英和の星印付き見出し語について、考えられる限りの英文をタイプしてもらっていた。10万例くらいあるという。その中で短い例文を和訳してカード化することにした。結局3万5千枚ほどになった。そのほかイギリスで出版されている主だった会話教本などから1万2千枚ばかりの対話例を引き出した。また語法カード8千枚も用意したが、これらは国内ですでに論じられ一定の答えの出ている語法を扱った諸本をばらしたもので、**For reference only** であることはもちろんである。五十音図順に並べるのも大仕事であった。全文使えるように整ったのは原稿執筆が8割方終わったところである。初校で活用するほかなかった。会話カードから採用された対話例は340ほどで、35枚の中から一例を選んだので、類書にまさるものが入っている。

さて、1984年(昭和59年)春ようやく第一回の会議が開かれた時点に戻る。その頃、小西先生の体調はまだ万全ではないようだった。息子さんの英二さん(現神戸大学医学部教授)が、会議が終わるのを、戸口に立って待っておられたほどだった。この初めての会議には、女性の先生が多く、男性は数名にすぎなかった。三省堂は、この辞書についての抱負をのべ、小西先生が、この辞書の目指すところを専ら、語学的側面にライトをあてて話された。類語間の記述について話された。「食べる」と「食う」は類語だが、個別に記述すると重なりが多く出る。「食う」では、その重なり部分を削除し、「食べる」に参照させる。そうすることによって、スペースが生まれるので、そのスペースで他の有用なことを書くことができる。だが重なり部分を全部カットしてしまったのでは辞書として機能しなくなることもあって……むずかしい話になるのであった。

とにかく執筆の練習をしてもらうことにした。類語グループカード(グループごとに執筆行数が指定されている)をご覧に入れて、好みのグループを選んで執筆していただき、小西先生に見ていただくことにして会議は終わった。

この執筆の方法をとると、校閲時の手間が大いに省け、編集期間の短縮が見込まれた。書いてもらった原稿は私も拝見したけれども人様々であったので、小西先生による見本原稿をお願いした。「息子にもいろいろ意見を言ってもらってね。やっと出来上がったんだけど組んでみてください」と渡された原稿はすばらしかった。「買う」の項はその時書かれたもので、「美津子はお母さんに新しいスーツを買ってもらった」の美津子さんは震災の時、両親の無事を祈って闇の中を走ったお嬢さんのことである。『グランドセンチュリー和英辞典』のこの稿をぜひお読みいただきたいと思う。学習和英辞典とはいかにあるべきかの答えがここにあると思うからである。

執筆陣が手薄である。このことは明らかである。会社でもう少し何とかしてもらえないかと不満が囁き始められたとき、二人の校閲者決定の通知をいただいた。岸野英治先生と三宅胖(ゆたか)先生である。岸野先生は、当時、京都大学に出講され英作文を教えておられた。三宅先生は母校の神戸大学で英作文を担当しておられた。「私、今学生といっしょに竹山道雄の『ビルマの堅琴』を訳してますんや」小西先生とえらい縁の深いお方や、と心中思った。このお二人につづいて何人もの大学の先生が執筆陣に加われた。辞書執筆の

経験のない先生は岸野先生から月ごとに指導を受けられたと聞いている。いい原稿なのだが全体の中では浮いてしまう、そういう原稿を書く人もいた。調和が大切である。執筆練習が過酷を極めた例を申し上げよう。この執筆者は滞米4年の経験があり、会話も堪能のようであった。「ありがとう」項は自分にぴったりの項目と考えて執筆を買って出られた。これがなかなかうまくいかないのであった。岸野先生の赤字、小西先生の注文と関門があり、書き改めるとまた弱点を指摘される(サゼッションは出るが答えは教えてもらえない)。こんなふうに何度も原稿のやり取りをすると、執筆者のほうはどうしていいか分からなくなりノイローゼ気味になる。Breakdown 寸前でOKが出た。そのときの“苦”労作が本にそのまま出ている。＜会話＞は後から追加されたものも入っているかもしれない。いやはやご苦労様でした。

原稿はなかなかできあがらなかった。小西先生に進み具合を報告すると、「たいした量を頼んでいるのではないのになにをしているんでしょうね。私ならさっさとやってしまいますがね。時々、督促してください」という調子。その口で、「出版社はさばを読んでいますからね、急がないでじっくり腰を落ち着けてやればいいんですよ」などと、二枚舌を使われる。

初校の校正はちゃぶ台をひっくり返すような大騒ぎになった。本になるまでにあと160ページふえてもよいように設計してあったこと、初校担当の先生方に分担分野で最大限がんばれと、檄を飛ばされたことが相まって、猛烈な赤字が入った。訂正、追加、訂正の連続で紙面は細かい字でいっぱいになった。よほど注意しないと新しい書き込みが、ゲラのどこに入るかも分からない有様であった。辞書の出版社にいと、赤字の量の多いのに不感症になるが、この赤字の量には驚いた。でも小西先生がそれでOKということなので、すでに原稿で校閲をすませていた岸野先生からも三宅先生からも苦情や文句は出なかった。ただ若い井上永幸先生は書きすぎるのである。大きな記述のかたまりごと捨てられた記述も枚挙にいとまがない。

岸野先生は決断が早く“えい”とばかりに削除される。削り名人と言ってもよいだろう。かつて、『新クラウン英和』の編者河村重治郎先生は、「なにを入れるかでなく、なにを入れないかが辞書編集の極意である」と述べておられる。まこと至言と言うべきである。このように進行できたのは、小西先生の統率力による。先生は常に大勢でやる仕事では人の和を大切にされ、人選もその線で行われている。小西先生の回りには英語のよくできる人は大勢おられるが、AさんとBさんならいいけれども、AさんとCさんとは行く行く問題が起きそうだ、など人事面で非常に慎重である。軍隊の経験から学ばれたことが多かったのではないだろうか。

和英辞典ではネーティヴチェックが欠かせない。都築郷実先生が担当された。ソニーの会話学校(梅田校)でただひとりの日本人講師であり、この仕事にうってつけの方であった。単にチェックを受けるにとどまらず、ネーティヴと対面でやることもできた。自らか

ら日本人が犯しそうな文を作って、ネイティブの反応を探るということもされて、そのことが印象的である。

付録といっても「基本文型表」は、一々の項目で調べられるように編纂すれば便利なのだが、紙面を食うので、付録で一括して記述したものである。“意味と文型”の問題で学習上大切なのに、高校の先生の中には評価してくれない人もいて残念に思っている。私の提案で作ってもらったものだが、執筆は森昌一先生と山岡憲史先生によっている。どう書けばよいか森先生は悩まれて、小西先生に相談されたが、例に拠ってサゼッションは与えられるが、答えは出されない。引き受けた以上、答えは自ら出すべき、というのが先生の答えであったようだ。安易な態度で辞書などできませんよ、というメッセージである。

小西先生は中学生のとき恩師から「十学んで一教える」ということを学ばれ、それを座右の銘にされていた。私は先生からいただいた『英語への旅路』(1997)をよく読み返す。易しそうに書かれている多くの事柄が、先生の辞書編纂のバックボーンになっていることを知る。佐々木先生も『言語の諸相』の中で、辞書編纂に役立つ様々なことを述べておられる。背景に確固たる学問がなければ辞書はできないのだ。(それだけではだめですけどもね)

さて、かなり仕事が進んだとき、会社は今年中に本に出来ないかと言い出した。たしかにスタートしてから8年ほど経っているのだから無理からぬことである。しかし立派な本に仕上げるためには、しなければならないことが山ほどある。営業局長(当時常務だったと思う)が、直接小西先生にお願いすると言う。「お金のことならいくらでも用意します。どうかよろしく」と言ったようなことが何度も繰り返される。「何とかします」と先生は言われた。編集会議も開かれ、一同に協力を要請された。しかしいくらお金を積まれてもこなせる仕事の量は、良心的にやる限り、そうはアップしない。小西先生は立場上いらいらして、「中嶋さん、出せないと思っているんでしょう」と言われる。出せないものは出せませんよ、“腰を落ち着けてやりましょう”とはちょっと言いづらいし、黙っていた。辞書部長は俺の首が飛ぶと泣きを入れてくる。いろいろありましたな。

校正が一応終わり、類語・類縁語のグループを今度は五十音図順に並べ直す(コンピュータ上では変換する)作業に入った。変換してみると、重複して書かれた部分が多に多い。先生方にも重複部分の校正を最重点にお願いしたのに、返送されてきたゲラは新しい事柄(用例とか注釈とか)の記入ばかり力が入っていた。社でも重複部分削除を懸命にやったが、今と違ってコンピュータ上で正確にチェックする技術がなかったので、仕上がった本には、重複部分がたくさん出てしまった。なんとも不様なことで申し訳ない。

この本には会社からの提案で入れたものがいくつかある。

(1) 本文中にちりばめられた15の会話ページ。一つの場合面に対し、4種の基本会話が示されている。ディスコースを示す格好の場となった。見開き2ページで注まで入れて一場面を完成させいと思った私は、井上先生に出来るだけ要点を絞った注を書いてほしいと頼んだ。ところが、小西先生にお見せしたら、「これではまずい。高校の先生方に喜んで

らえるような注でないと。私がやり直しますから、後で井上君にも回して見せてやってください」と言われてしまった。『ニューセンチュリー和英辞典』の初版、二版で注が、別ページにあるのは、そういう経緯による。『グランドセンチュリー和英辞典 第二版』でこの会話ページが姿を消したのは Longman 社との契約期間が切れたからで、不都合があったからではない。

(2) もう一つは、漫画をたくさん入れたことである。ブラックユーモア系の絵が多く、高校の先生の反応が心配だったが、もっとたくさんとの要望が圧倒的だ（神経質な人が削除を要求してこられたケースもあり、今は少し数が減っている）。英米人の漫画家に描いてもらったらもっといいものができるのではないかと思っている。お金持ちの出版社の方、ためしてみられたら？ 高校生の中には、辞書を引くのは苦手と言う人たちがたくさんいると思う。ぱっと開いたページに面白い絵が入っていた。また引いてみよう、となることを願っている。

本が出来上がって、小西先生に「出版祝賀会をしなくてはなりませんね」と申し上げたら、例の特長のあるエッヘッヘに続いて、「中嶋さん、そんな派手なことをして、辞書が売れへんかったらかつこ悪いでっせ」。要するに固辞された。先生は晴れがましいことはあまり好きではない。先生の心配をよそにこの辞書は大ブレイクした。（先生小さな声で「こんなに売れるとは思わなかった」と後日言われた）。1992 年 5 月、春の叙勲で、先生は長年の功績で高位の勲章を受けられた。先生は素直に喜んでおられるようだった。その時、お祝いにご宿泊のホテルに役員と伺った。「出版記念会をぜひやりましょう」と役員。「やりましょうか」と明るく先生。だが、神戸に帰られた先生は、久しぶりの旅行でお疲れになったのか、しばらく、寝たり起きたりの生活だと奥様から伺った。奥様もごいっしょに上京され、先生と役員の歓談中、私と雑談されていたのだが、「お前はしゃべりすぎると主人に叱られました」と電話口でおっしゃった。何とも正直なお方である。このとき先生はまだ 75 歳前であった。

社内での新刊本説明会には岸野先生に来ていただいた。理路整然としていて分かりやすく、高校へ出向く営業マンも大いに自信を持ったのであった。大修館では「うちの著者（小西先生のこと）をとられた」とおこっていたという。そういうことになるのでしょうか？

小西先生によると、初版の出来栄は 70 点ということであった。きっと、あの重複部分があったことで、10 点は減点されて、あとは内容の不十分で 20 点減となるのかなと、その時思ったけれども、ずっと後になるまで、先生方にはこの採点のことは伝えなかった。内容についての批判や苦情は社にはほとんど寄せられなかったが、語彙が少ないとの苦情はものすごく多かった。そこで、出版間もなかったが、改訂版を作ることにした。その後、改訂版を、1996 年(平成 8 年)、書名を『グランドセンチュリー和英辞典』と変更して、2000 年(平成 12 年)、2005 年(平成 17 年)に出している。そのたびに、岸野先生、三宅先生には大きな負担をかけたけれども、内容が改善されたので、今では 90 点以上の点をいただける

ようになったと思っている。私も最近は執筆や用例の提供を行ってきたが、すべて小西先生のお役に立てばとの一念でしてきたことであるので、四半世紀かかわってきたこの辞書ともお別れしたいと思う。

全くの余談になるけれども小西先生を知る上で避けて通れないことがある。先生と私は、仕事のことは葉書でやり取りすることが多かった。だが、葉書では日数がかかりすぎるから、いつしか電話で用を足すように変わっていった。「先生お元気ですか」「まあまあです。エッヘッヘ」この笑いが出るとともに話は佳境に入る。私もしゃべるし、切るに切れなくて、小一時間というのはざらである。それでも、仕事のことは、何一つ決まらないことも結構あった。奥様もあきれ返っておられたようだ。ある日、突然電話がかからなくなった。仕事の邪魔をするなどとも言いたげに。また葉書の時代に戻った。そのころから、私の質問に対するお返事は核心から妙にずれ始めた。それがいつごろだったかは思い出せない。次善の策として、三省堂⇄小西先生専用のファックス通信を思いついた。「先生、三省堂専用のファックスを入れさせてもらえませんか」「それはどういうものですか。私がしゃべったらそちらへ文字になって届くのですか」。二の句がつげぬとはこのことで、私は、この件は直ちに諦めた。この事件以来もう 12、3 年にもなるだろうか。小西先生のおっしゃったことは実現可能の範中に入ってきてつつあるようだ。

小西友七編 『ウイズダム和英辞典』(2007)

営業部から『グローバル英和』の対になる和英が欲しい、と言われ始めてだいぶ経っていた。私は似たような、語彙の多い和英を、『ニューセンチュリー和英辞典』と同じ市場に向けて出すことには消極的であった。作れと言われれば作るけれども程度の気持ちだった。そのうち小西先生からも、三省堂は語彙の多い和英がないから作ってはどうかと言う打診がくるようになった。1995 年の夏前、『グローバル和英辞典(仮称)』を作っていただく件で神戸のお宅へ社の幹部の人たちといっしょに伺った。小西先生は当然積極的で、細かい話はあとで中嶋に話すからといわれた。社の幹部の人たちは大喜びであった。その後、本のはしがきに述べられているような特色を盛ることになった。ご面倒でも辞典のはしがきをご一覽いただきたい。それを、5、6 年かけて本にすることに決まった。小西先生が最も強調し、そのように実現することを望まれたのは、『ニューセンチュリー和英辞典』から極力離れることだった。このことを小西先生の言葉で表現すると、「既存の内容を 30 パーセント減らして、別の新しい内容で埋め戻す」となる。『ニューセンチュリー和英辞典』をすでに使ってる読者に、ただ単語だけを付け足したものを売ることに罪悪感をお持ちのようだった。某社にはそういう和英があるし、それなりに売れているのではないかと思う。30 パーセント内容カットは先生の譲れない線だった。一方、岸野先生は『ニューセンチュリー和英辞典』だけでも手一杯なのに、それより大きいものを小西先生のご希望に沿って編集

するのは、身がもたないという思いだったのではないか。それよりも改善された版の成果をそのままらい、なるべく多く内容の入れ替えを別途ほどこすのが人員体制が厳しい現実を乗り切るいい方法だと考えられたのである。そこで小西先生と岸野先生との路線をめぐるせめぎ合いが繰り返され、そのたびに岸野先生ははねつけられるのであった。それがどうして今のような本になったか。それは三省堂が『ウイズダム英和辞典 第二版』の出版に合わせて、和英も同時発売にしたいと言い出したからである。『グランドセンチュリー和英』の第二版が出来上がったのが、2005年1月だったから、そのままウイズダムの方へ移行したとしても、編集期間は1年10か月ぐらいしかない。だから岸野方式でしか乗り切れない。そういうことなのだった。この方式でやるのであれば、既に追加語彙の1万数千は校閲の段階までおわっているのだから、『ウイズダム和英』の独自の特長を整えればいいわけである。”デイスコース”と”“翻訳のこころみ”“名言名句”などは独立して書ける部分だから、それが出来上がるまでに大勢で本文を読み、必要なものを加え、不要なものをのぞく仕事をすればよいことになる。小西先生の提案された **Lexical phrase** の明示は、何人もの人でやればやるほど統一が取れなくなるとの理由で取り止めになった。新しい試みである頻度チャートには疑問がある。以下、実現したこと、計画したが実現しなかったことを列記してみよう。

(1) 本文の削減

これを行う趣旨は上に記したとおりである。この仕事は、三宅先生、塩濱久雄先生、岸野先生の3名で行われ、三宅先生の削除が私はいいと思う。量は塩濱先生がいちばん多かった。丁寧な削減でやれば22パーセントから25パーセントが限度だという。とすれば小西先生が言いつづけられた30パーセント削減は、最大限の削除を求めるラッパだったのだ。ご自身『アンカー英和』で「カットするのはいかにむずかしいかをいやというほど味わいました」と書き残しておられる。この仕事は結局むだに終わってしまったので、これ以上はふれない。

(2) 語彙の蒐集とその選択

国語辞典とベースになる和英の見出し語を比較し、前者にあり、後者にない語の一覧表を作り、後は感覚で単語を絞り1万数千語を選んだ。執筆者にあてがった部分は自分で語の選択をしてほしいと頼んだけれども、尻込みされるので、私と井内さんの二人で選んだと思う。井内さんは私よりずっと語彙が豊富だったから、初めからすべてを彼に頼むべきだったかもしれない。

(3) 執筆

一般の国語語彙は、確か5名で書いた。それを岸野先生がおひとりで校閲された（以下の特殊語についても同じ）

(4) 特殊語 1) 日常医学・料理・動植物その他の用語は芦谷民枝先生の担当。非常に幅広い知識の持ち主。彼女の原稿は校閲者を喜ばせた。2) 商業用語を扱って社会人にもある程度満足してもらえよう配慮することにした。担当者は長谷川文代先生。かつてソニーで貿易実務で活躍した方。三省堂から渡した資料および1年分の *USA Today* の経済欄

から作ったカードをもとに執筆。詳しすぎだが、校閲者は、全体のバランスをとるために、せつかくの執筆者の努力を無にしたと思う。特色を出すためにバランスを崩しても良いのではないだろうか。3) カタカナ語は都築先生に依頼した。 *USA Today* を1年間送り資料としてもらった。(コンピュータなど専門性の高い語については、その道の方に依頼したはずである)。

(4) 野球用語は佐藤尚孝先生に小西先生から直接依頼された。東京外大の後輩だから私にまかせろという感じだった。佐藤先生に依頼したのは大成功で、野球関係の記述はこの辞典が他を圧してよくなった。

(5) 本文中の特別項目“翻訳のこころみ”はその題材を高校教科書に求め、訳は曾我邦子先生に負っている。ネーティヴスピーカーの英語が書ける人といってもほぼ間違いない。英文の達人と言われた山田和男先生の英語とも違う。曾我先生の英語は一見平易だが知的で澄んでいる。同じような感じの英語を書く女性作家もいる。先生と同じように訳せるとする読者は自分の訳した英語とくらべられると私のいってることがよくお分かりになると思う。

(6) 日本語校閲が入ったのは非常によかった。特筆すべき出来事である。和英辞典では初めてのことでないだろうか。(佐々木先生のように英和辞典で日本語校閲をしたいと言われた方もある。“幻の大英和”編集集中のことであつた)。特に、和英ではその必要があると思っていた。某和英辞典は特に日本語に問題があるようだ。

(7) デイスコース

表紙裏の一覧表4ページだけでも価値があると思う。本文中の *Discourse* も併せ読めば、この方面の実力アップは間違いない。

(8) 本文の構成の変革

『ニューセンチュリー和英辞典』で小西先生が考えられた記述方式から完全に離れ、一般の和英辞典と同様になった。小西先生の言語哲学は失われたけれども、実用の書としての引き易さは増した。それでいいのではないか。

短い編集期間ではあつたが、校閲者はじめ関係された先生方、裏方の編集部一同の一致した努力で読者に喜ばれる中型和英が出来た。小西先生は、“はしがき”に「世の中で知られた最善のものを学びとり、これを公正に後の世に伝える」との **Matthew Arnold** の言葉を引用しておられるが、これこそが小西先生が学者として生涯崩されなかった姿勢であり、ゆるがぬ信念であつたのだ。88歳のご高齢にもかかわらず衰えなかった学問的な奉仕の精神を読み取らない人がいようか。自分の命の果てをひたと見据えた世阿弥も「後の世の人のために能を書き遺そう」と言い、さらにつづけて「命に終わりあり、能には果てあるべからず」とのべている。

付記

多くの人は、三省堂刊の『クラウン西和辞典』(2004)が、『ニューセンチュリー和英辞典』(1991)をベースにし、それを発展させる形で編集されていることをご存知ないのではないだろうか。ある日、編集長の柳百合さんから東大の上田博人先生から『ニューセンチュリー和英辞典』をそっくり使わせてもらって、和西辞典を作りたいのだが、小西先生にご意向を伺ってもらえまいか、と言う話があった、と一通の手紙を見せられた。小西先生は、「そのような試みに、私たちの作った『ニューセンチュリー和英辞典』をお使いくださるとは光栄なことであります」と即答された。この和西辞典の序には次のように書かれている。

「本辞典は豊富な用例で学習和英辞典として定評のある『ニューセンチュリー和英辞典』(小西友七編、三省堂：1991、現『グランドセンチュリー和英辞典』2000)の見出し語・例句・例文に基づき作成しました。データの使用を快諾された小西友七先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。この和英辞典と本書を同時に参照することにより、日本語→英語・スペイン語という方向で二つの国際語によるコミュニケーションが可能になります。「積極的に話す・書く」という「発信型」のスペイン語をめざす方々に、この辞典がお役に立つことができれば幸いです。2004年7月 編者」

転用の話があったのは、たぶん1993年のことだったと思う。雛型があっても10年を超える時間が必要であったことになる。このことは、辞書の編集に拙速は禁物であることを教えてくれている。

以上
(2008-3-14 記)